



TITLE:

泌尿器科領域における Cercine(Diazepam)の応用

AUTHOR(S):

原, 信二; 佐藤, 公彦

CITATION:

原, 信二 ...[et al]. 泌尿器科領域におけるCercine(Diazepam)の応用. 泌尿器科紀要 1965, 11(10): 1015-1019

ISSUE DATE:

1965-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112828>

RIGHT:

泌尿器科領域における Cercine (Diazepam) の応用

大阪医科大学泌尿器科教室（主任 石神襄次教授）

原 信 二
佐 藤 公 彦

USE OF "CERCINE" (DIAZEPAM) IN THE FIELD OF UROLOGY

Shinji HARA and Kimihiko SATO

*Form the Department of Urology, Osaka Medical Collige
(Director : Prof. Jyoji Ishigami, M. D.)*

"Cercine" (Diazepam) is a broad tranquilizer, having strong actions of muscular relaxant, anti-convulsive sedative and psychic energizing effects. It possesses several times stronger actions than Chlordiazepoxide in these respects. Excellent clinical effectiveness has been reported in various field of medicine.

This article deals with the results of clinical use of "Cercine" as single trial for patients with neurogenous urinary tract diseases without organic lesion and as combined therapy with antibiotics for patients with various urinary tract infections.

Out of 16 cases of neurogenous urinary tract diseases treated, excellent, good and no effects were observed in 10, 4 and 2 cases respectively. Out of 12 cases of various urinary tract infections treated, excellent, good and no effects were seen in 5, 6 and 1 cases respectively. As side effects, slight drowsiness was mentioned by 3 patients out of 28 cases, but it was not so much as to discontinue the medication.

I はじめに

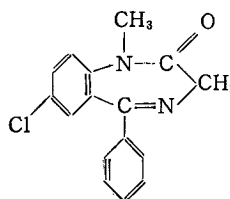
強力な馴化作用，筋弛緩作用，抗痙攣作用及び鎮静作用を有する広範囲精神身体調整剤である Diazepam は従来の Chlordiazepoxide より数倍の作用を有し，既に広く各科領域において使用され優れた効果を有することが報告されている。

泌尿器科領域においても神経症頻尿，膀胱神経症，夜尿症，精系静脈瘤による疼痛，性的神経症等の神経因性疾患に使用され，優秀なる治療効果が報告されている。

今回われわれは武田薬品より Cercine (Diazepam) の提供をうけ，各種神経因性泌尿器科疾患および各種尿路感染症の補助剤として使用しうる機会を得たので報告する。

II Diazepam (Cercin) の特長

本剤は7-Chloro-1, 3-dihydro-1-methyl-5-phenyl-2H-1,4-benzodiazepin-2-one で次の如き化学構造式を有する。



従来のBenzodiazepine に属する誘導体であるが，以前のものに比してその作用が強力であり，その反面副作用が極めて少なく，

作用発現が極めて早いと云う特長を有している。

III 臨床使用成績

1 使用対象

2つのグループに分け使用した。即ち第1のグループは尿路に器質的变化を認めない神経因子による尿路疾患，即ち膀胱神経症，小児尿意頻数症，慢性前立腺炎治療後の後遺症，精系静脈瘤，早漏の症例に。

第2のグループは細菌感染による尿路感染症に補助剤として使用した。

2 使用方法

原則として1日10mg 朝夕2回分服投与した。1部症例には1日15mg, 20mg 3—4回分服, 又小児においては1日4mg 2回分服投与した。

3 使用成績

効果の判定は投与後自覚症状の消失したものを著効

(++)と、自覚症状の軽減したものを有効(+), 症状の改善を認めないものを無効(-)とした。

その結果は第1グループ即ち神経因子に起因する尿路疾患16例に使用し、著効10例、有効4例、無効2例の成績を得た。

第2のグループ即ち尿路感染症には12例に使用し、著効5例、有効6例、無効1例の成績を得た。しかしこの場合の効果判定は非常に困難であると考え。な

表1 神経性泌尿器科疾患に対する臨床効果

症 例	年 令	性	診 断 名	投 与 量			効 果	副 作 用
				1日量 _{mg}	日 数	総 量 _{mg}		
1	22	♀	膀胱神経症	5×2	10	100	++	—
2	43	♀	膀胱神経症	5×2	8	80	++	—
3	35	♀	膀胱神経症	5×2	7	70	—	—
4	48	♀	膀胱神経症	5×3	10	150	++	—
5	18	♀	膀胱神経症	5×2	6	60	++	—
6	6	♂	小児尿意頻数症	2×2	10	40	+	—
7	7	♀	小児尿意頻数症	2×2	7	28	++	—
8	10	♀	小児尿意頻数症	2×3	5	30	++	睡気
9	25	♂	慢性前立腺炎(後遺症)	5×4	7	140	+	—
10	34	♂	慢性前立腺炎(後遺症)	5×3	10	150	++	—
11	27	♂	慢性前立腺炎(後遺症)	5×2	7	70	++	—
12	28	♂	精系静脈瘤	5×2	8	80	++	—
13	21	♂	精系静脈瘤	5×3	10	150	—	—
14	34	♂	非特異性副睪丸炎	5×2	10	100	+	—
15	24	♂	早 漏	10×1	3	30	++	—
16	26	♂	早 漏	10×1	間歇的 5	50	+	—

げならば抗生剤単独投与だけでも菌が消失すれば自覚症状はおのずと消失するのが当然の結果であるため。

しかし著効例において菌消失日数に比し、自覚症状が早く消退したこと、また菌の消失を認めない症例において自覚症状が軽減したことから考え併せて抗生剤との併用療法によつてある程度の治療効果が倍加されたのではないかと考える。

以下代表的症例についてのべる。

症例2 43才, ♀ (第1グループ)

診断: 膀胱神経症。

主訴: 頻尿。現症: 出産後約1年前より昼間頻尿を訴え、某医により種々抗生剤投与を受けるも無効来院す。

来院時所見: 外診上腎、膀胱部に異常を認めない。尿所見、尿清澄、検鏡にて病的所見を認めない。膀胱鏡所見は正常。

経過: Cercine 1日量 10mg 2回分服8日間投与した所、2日後自覚症状全く消失した。その後再発症状を認めない。

副作用: なし。

症例6 6才, ♂ (第1グループ)

診断: 小児尿意頻数症。

主訴: 昼間尿意頻数。

現症: 約半年前より排尿痛、血尿を伴わない頻尿を訴え、種々の療法を試みたが無効来院す。

来院時所見: 外診上、腎、膀胱部、外性器に異常を

表2 尿路感染症に対する抗生剤との併用臨床効果

症 例	年 令	性	診 断 名	併用抗生剤	起 因 菌	投 与 量			効 果	副 作 用
						1 日 量 mg	日 数	総 量 mg		
1	22	♀	急性膀胱炎	ウロサイダル	大腸菌	5×2	5	50	++	—
2	29	♀	急性膀胱炎	ウロサイダル	大腸菌	5×3	6	90	++	—
3	44	♀	急性膀胱炎	ウイントマイロン	大腸菌	5×2	5	50	++	—
4	39	♀	急性膀胱炎	アクロマイシン	大腸菌	5×2	6	60	+	—
5	45	♀	急性出血性膀胱炎	クロロマイセチン	ブ球菌	5×3	6	90	++	—
6	18	♂	慢性膀胱炎	ウイントマイロン	大腸菌	5×3	5	75	++	—
7	34	♀	慢性膀胱炎	カナマイシン	変形菌	5×2	7	70	—	—
8	55	♀	慢性膀胱炎	カナマイシン	肺桿菌	5×2	7	70	+	睡気
9	32	♂	慢性精囊腺炎	エリスロイシン	肺桿菌	5×3	5	75	+	睡気
10	19	♂	慢性尿道炎	ウイントマイロン	変形菌	5×2	5	50	+	—
11	25	♂	慢性尿道炎	エリスロマイシン	ブ球菌	5×2	5	50	+	—
12	34	♂	慢性尿道炎	オレオンドマイシン	変形菌	5×2	7	70	+	—

認めない。尿所見、特記すべきものなし。尿道膀胱撮影にて所謂膀胱頸部強直症の所見を認めず。

経過：Cercine 1日4mg 朝夕2回分服。10日間投与した所、3日後より徐々に尿回数減少6日後には全く正常回数に復した。

副作用：なし。

症例12 28才、♂。(第1グループ)

診断：右精系静脈瘤。

現症：約2年前より会陰部の鈍痛不快感。陰囊の牽引感を訴え来院す。

来院時所見：右陰囊部精索に沿って静脈怒張著明、副睾丸、睾丸に異常を認めず。

経過：静脈瘤根治術施行したが尚陰囊部に牽引感を認めたので Cercine 1日10mg 2回分服8日間投与した所、3日後陰囊部牽引感消失、加えて気分良好となった。

症例15 24才、♂。(第1グループ)

診断：早漏。

現症：結婚後1年を経過するも早漏のため満足な性生活が出来ず、そのためノイローゼとなり来院す

来院時所見：外性器に異常を認めず、副睾丸、睾丸、精管に器質的变化を認めず

経過：Cercine 10mg を性交前1時間前に服用経過を観察した所、性交時間の著明なる延長を認めた。勃起力、快感等の性交時情緒には変化を認めなかった。その後、3回服用し満走すべき結果を得、現在では服

用を中止しているが、早漏は全く認めない。

副作用：なし。

症例4 39才、♀ (第2グループ)

診断：急性膀胱炎。

主訴：頻尿、排尿痛。

現症：約10日前より頻尿、排尿痛を訴え某医によりサルファ剤の投与を受けたが無効来院す。

来院時所見：尿軽度混濁、検鏡にて白血球(++)、赤血球(+)、大腸菌(++)、膀胱鏡所見は膀胱粘膜発赤著明。

経過：アクロマイシン1日1g 4回、Cercine 1日5mg 2回分服、6日間投与した所尿所見に改善を認めなかつたにかかわらず、頻尿、排尿痛は軽減した。

副作用：なし。

症例8 55才、♀。

診断：慢性膀胱炎。

主訴：頻尿。

現症：約半年前より頻尿を訴え某医により種々の抗生物質の投与を受けたが無効来院す。

来院時所見：尿軽度混濁、検鏡にて白血球(++)、グラム陰性桿菌、尿培養にて肺桿菌を認む。膀胱鏡所見は膀胱粘膜浮腫状を呈す。

経過：KM 1日1g 1回、Cercine 1日15mg 3回分服、7週間投与した所、尿所見、膀胱鏡所見に改善を認めないにかかわらず、頻尿は軽減した。

副作用：軽度の睡気を訴えた。

4 副作用

28例に使用し、3例に軽度の睡気を認めたほか、特記すべき副作用を認めなかった。

IV 考 按

泌尿器科領域において尿路に器質的变化を伴わない各種神経症に対する精神安定剤の使用に関する報告例は少なくない

又各種尿路感染症においても患者の自覚症状を早く除去する目的で各種抗生剤との使用療法に関する報告例も2、3認められる。

諸氏の報告によれば精神安定剤は使用範囲が広いにかかわらず副作用が少ない点、習慣性のないと云う利点をあげ精神安定剤の優秀性を認め、今後益々利用されることを強調している。

今回われわれは従来の Chlorpromazine, Meprobanate, Chlordiazepoxide より更に強力な作用を有する Diazepam (Cercine) を武田薬品より提供を受け2つのグループに分けその臨床効果を検討した。

即ち第1のグループは尿路に器質的变化を認めない神経因子による疾患、第2のグループは尿路感染症に抗生剤と併用使用した。

結果は第1のグループでは16例に使用し、著効10例、有効4例、無効2例の卓越した治療効果を得た。

第2のグループでは12例に使用し、著効5例、有効6例、無効1例のかなりの治療効果を得た。

これらを小括すると第1のグループ：小児尿意頻数症を含めての膀胱神経症8例では、著効6例、有効1例、無効1例、慢性前立腺炎（治療後の会陰部不快感）3例では著効1例、有効1例、精系静脈瘤2例では著効1例、無効1例、非特異性副睾丸炎1例では有効1例、早漏2例では著効1例、有効1例の成績を得た。特に不安、緊張、自律神経失調等の精神因子を基調とする症例において効果が著明であつた。

第2のグループ：急性膀胱炎5例では著効4例、有効1例、慢性膀胱炎3例では有効2例、無効1例、慢性精囊腺炎1例では有効1例、慢性尿道炎3例では有効3例の成績を得た。

しかし第2のグループ即ち尿路感染症におけ

る抗生剤と精神安定剤との併用療法については各々の薬剤の効果が交錯しており、その臨床効果が判然としない点に問題があるが、尿所見等の他覚的所見において改善を認めない症例において Cercine 投与によつて思いのほか自覚症状が改善された症例が認められた点、又表3に示すように自覚症状消褪日数が菌消失日数に比してかなりの差がある点から Cercine 投与によつて臨床効果が倍加されたのでないかと考えられる。

表3 併用療法による自覚症状消褪日数と菌消失日数との関係

症例	年・令性	診 断 名	起因菌	自覚症状消褪日数	菌消失日数
1	22♀	急性膀胱炎	大腸菌	2	4
2	29♀	急性膀胱炎	大腸菌	2	5
3	44♀	急性膀胱炎	大腸菌	2	4
5	45♀	急性出血膀胱炎	ブ球菌	2	5
6	18♂	慢性膀胱炎	大腸菌	3	5

以上 Cercine を各種尿路疾患に使用した結果について考察してみると、泌尿器科に訪れた、尿路に器質的变化を伴わない神経性と考えられる症例には先ず minor psychotherapy を行ない、患者の不安を取り除く事が大切であるのはいうまでもないが、minor psychotherapy によつて治療出来得ない症例が多々あり、その際初めて精神安定剤を投与することが望ましいと考える。

又そのように不安をある程度取り除いた上で精神安定剤療法はかなりの治療効果をもたらすと考ええる。

外来を訪れた神経性の症例にみだりに精神安定剤を投与することによつて更に症状を悪化させることがしばしば認められる。

例えば内分泌欠陥を伴わない機能的インボテンツの場合根気のいる心理療法が効を奏することは常識であるにもかかわらず、精神安定剤の投与を行ない訴えを悪化させた症例をしばしば認める。

このように精神安定剤を優れた薬剤として容

易に投与し、慢然と経過を観察することは慎まなければならないと考える。

むしろ使用範囲を別の方向、例えば尿路感染症に抗生剤と併用投与し、患者の自覚症状を早く消褪してやるべきと考える。

この意味で副作用の少ない、習慣性のない、広範囲に使用出来る Cercine は神経因性尿路疾患は勿論、各種尿路感染症にも今後益々応用出来ると考える。

V 結 語

尿路に器質的変化を認めない神経因性尿路疾患16例に使用し、著効10例、有効4例、無効2例の優秀なる成績を得た。

又各種尿路感染症12例に各種抗生剤と併用使用し、著効5例、有効6例、無効1例のかなりの治療効果を得た。

副作用としては重篤な症状を認めたものはなかった。しかし28例中3例に軽度の睡気を訴えたものが認められたが、投与を中止するほどのものではなかった。

以上の成績から Cercine 投与の適応となるべき症例は神経性尿路疾患は勿論、各種尿路感染症にも今後益々使用しうると考える。

文 献

- 1) セルシン文献集 No.1
- 2) セルシン文献集 No.2
- 3) 森昭・福井一郎・谷村実一：臨牀皮泌，**16**：597, 1962.
- 4) 南武・町田豊平・佐藤英資：泌尿 紀要，**8**：734, 1962.
- 5) 稲田 務・北山太一他：泌尿紀要，**10**：168, 1964.

(1965年5月25日受付)